

田嶋 英行『D.F.Krillによる実存主義ソーシャルワークの独自性

—米国における実存主義ソーシャルワーク諸論の比較研究—』

ソーシャルワーク実践現場において、人が抱える問題を前にしたとき専門家として、その人に何も出来なく、立ちすくんでしまうことがある。目に見える具体的なものを探しあぐね、そこに何も見つからない。その人が生きる意味を失って、さまよい続け、ソーシャルワーカーの前にあるとき突然現れたとき、そんな感情にとられる。

本論文では、「疎外」とは「自らが存在する意味を把握することができず、自己が不安定な状態にあることを意味する」(11頁)と定義している。その上で、実存主義ソーシャルワークがソーシャルワークとして成立する二つの要件をあげている。「ソーシャルワークは、問題の原因をクライアント個人の中ではなく、むしろ社会のあり方の中に求めていく」(13頁)、そして「『ソーシャルワーク』として存在するためには、クライアントにおける『疎外』の原因を社会的要因に求め、さらに何らかの社会的アプローチによって対応している必要がある」(13頁)と、その2つの成立要件を述べている。その上で、Krillによる実存主義ソーシャルワークは、実践としてのソーシャルワークとして成立すると著者は結論づけている。

Krillとの比較の対象者として、Bradfordのヒューマニスティックモデルは「エンカウンターを概念を取り入れることによって、ソーシャルワーカーとクライアントにおける『より人間的』な関わりのあり方を提示した」が、二つ目の成立要件は満たしていないと指摘した。Weissは『生産者と消費者が織り成す経済活動の中に放り込まれたことによって、あたかも物のように番号が付けられ、数えられ、分類されてしまいます』という社会的要因に『疎外』の原因を捉えているが、「社会的アプローチをおこなっているとはいえない」ために、やはりその要因を満たしているとは言えないと述べている。

ソーシャルワークの目に見える具体的側面からだけでなく、目に見えにくい「疎外」という側面から、ソーシャルワークを取り上げ、その議論を展開していることは意義深い。その目に見えない疎外や実存というものを、その人の個人の中ではなく、社会的要因と社会的アプローチと関連づける必要があると著者は言う。その議論のこれからの発展をこころ待ちにしたい。